

# 最新の「学習指導要領」が、「絵に描いたモチ」になってしまっている意外な理由

【現代ビジネス】2022.05.20

児美川 孝一郎, 前川 喜平

元文部官僚の**前川喜平**氏と法政大学教授でキャリア教育が専門の**児美川孝一郎**氏が、この**30年**の教育政策について語り合った『[日本の教育、どうしてこうなった？](#)』（大月書店）。以下では、同書のなかから、**2017～2018年**に改訂された学習指導要領の問題点についてお二人が語った部分をご紹介します。



## 派手な改訂

児美川：2017年・18年改訂の現在の学習指導要領についておうかがいしたいと思います。

この改訂は、教育内容ではなく「育てたい資質・能力」ベースで教育課程を組むとか、「社会に開かれた教育課程」や「学びの地図」といった目標設定とか、あるいは「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）や「カリキュラム・マネジメント」の導入など、なかなか派手な、いろいろな意味で話題が満載な改訂になりました。

それぞれについては、もちろん多様な意見がありました。批判的な見解も多々出されたように思います。ただしここでは、そのすべてを論じている余裕はありませんので、一点に絞ってお聞きします。

この改訂では、そこに盛られた中身を本気で実現しようとするれば、当然のこととして、教育内容を精選しなければ不可能だったのではないかと思うのです。それぞれの教科・科目の内容を「知識・技能」として身につけるだけでなく

て、アクティブ・ラーニングを通じて「思考力・判断力・表現力等」の獲得にまでつなげていくことが求められています。

さらには「学びに向かう力、人間性等」の育成も。当然、これまでの授業のやり方よりもかなり時間がかかるはずです。それなのに、教育内容は減っていません。

そもそもの最初から、教育内容は削減しないということを前提にして、教育課程の改訂論議がスタートしていました。それはどういうことなのでしょう。

# 最新の「学習指導要領」が、「絵に描いたモチ」になってしまっている意外な理由

児美川 孝一郎, 前川 喜平プロフィール

前川：今回と前回の学習指導要領改訂は、文科省のなかで中心的にやった人物がいるんですね。合田哲雄君というんですけど。彼はものすごく理屈っぽい人なんです。今回の学習指導要領も、形式論理性みたいな構造をつくることに腐心している。教科ごとに「見方・考え方」があったりね。

児美川：すべての教科・科目にそれぞれの「見方・考え方」が書き込まれ、かつ各教科・科目の内容もすべて「資質・能力」の3つの柱に沿って記述された。いわば、各教科・科目が縦軸、見方・考え方と3つの資質・能力が横軸となったマトリクス上にすべてが配置されました。芸術系の科目だろうが、体育だろうが例外はありません。その限りでは、形式的な論理性は究極まで貫かれています。ちょっと気持ち悪いくらいです（笑）。

前川：いかにもきれいに整理されているように見えるんだけど、そんなふうに整理しきれないものじゃないと思うんですけどね。書き込みすぎ、考え込みすぎ。要するに、やりすぎ。

もともと学習指導要領というのは、1976年の最高裁の判決、いわゆる旭川学テ判決で言われているように、「大綱的基準」として合憲性が認められているものなんだから、もっと大ざっぱなものでいいんですよ。ところが教育方法まで書き込んであって、やりすぎだと思います。

児美川：学習指導要領は「大綱的基準」であるべきという原則的な考え方は大事ですね。そこに照らせば、現行の学習指導要領ははるかに詳細なところにまで踏み込みすぎています。

今回の改訂を見ていて、学習指導要領に書かれている内容を、アクティブ・ラーニング等の教育方法も含めてすべて真面目にこなそうとしたら、日本中の子どもたちにとっては詰め込みすぎで、学習も頭のなかもパンクしちゃうと思うのです。そんな教育課程は、先生たちだって、手に負えないはずですよ。

# 最新の「学習指導要領」が、「絵に描いたモチ」になってしまっている意外な理由

児美川 孝一郎, 前川 喜平プロフィール

前川：もともと、ゆとり教育批判が背景にあったわけです。たとえば、小学校で都道府県を覚えさせるのはいったんやめていたのに、「都道府県も覚えていないようでは日本人じゃない」みたいに言う人がいてね、また暗記させるのを復活しているわけですよ。

あるいは、2次方程式は高校からでいいと、いったん中学校から外したんだけど、また復活している。それどころか、球の体積の公式というのが加わっているんですけど、球の体積の公式  $(4\pi r^3)/3$  って、中学生の場合、暗記するしかないんですよ。これを導き出すためには積分を勉強していなければならないから。

つまり、ただ公式を覚えろという話で、そんなの数学じゃないですよ。それならスマホで「球の体積」で検索すればすぐ出てくるわけで。「ゆとり」か「詰め込み」かの二項対立から脱却すると言ってはいるんだけど、実際には詰め込みのほうに寄っちゃっている。

## 「ゆとり」からの反動

児美川：そうですね。1998年・99年に改訂された学習指導要領が「ゆとり教育」と言われました。本当は「ゆとりの時間」を導入した1977年の改訂以降が、広い意味でのゆとり教育だと思うのですが、教育内容を大胆に精選して減らしたのが98年・99年の改訂だった。

その98年・99年改訂の学習指導要領は、2000年を迎えてから社会的に大きな批判を浴びることになりました。小学校の算数では円周率が3になってしまうと大騒ぎをした塾業界の宣伝もありましたし、京都大学の西村和雄さんたちが『[分数ができない大学生](#)』（東洋経済新報社、1999年）といった本を出版されたことなども大きなインパクトを与えました。

# 最新の「学習指導要領」が、「絵に描いたモチ」になってしまっている意外な理由

児美川 孝一郎, 前川 喜平プロフィール

児美川：その結果、文科省は次の学習指導要領改訂を待たずに2002年には「学びのすすめ」を出して、教育内容を精選していくという路線を事実上、巻き戻しました。学習指導要領は最低基準なので、理解が進んでいる子どもには発展的な学習をさせるといったかたちで、「ゆとり教育」路線を「確かな学力」路線へと切り換えたとも言えます。

こうした経緯を経て、2008年・09年の学習指導要領改訂では、前回の1998年・99年改訂で精選したものをまた元に戻したわけです。今回の2017年・18年改訂はその次に来たわけです。本来であれば、維持すべきところは残し、詰め込んでいるところを点検して精選するという両方の観点が必要だったと思うのですが、そうはならず、「内容は減らさない」ということが議論の出発点になっていました。

前川：まあ、両方とも合田君がやったからいけないんですよ（笑）。2008年・09年の改訂のときに合田君は、初等・中等教育局の教育課程課の教育課程企画室長だった。改訂の事務方の中心的な役割を担っていたんです。

今回の改訂も合田色が強い。合田君が教育課程課長になったので。私が初等中等教育局長だったのが2013年～14年でしたが、合田君を課長にするつもりはなかったです。合田君がやったものを見なおすことのできる人間がやらないとダメだと思っていましたから。

ところが私の後任になった小松親次郎君は、合田君がいいと思ったんでしょうね。合田君は合田君で、前回やり残したことがあったんですね。こういう、文科省で誰が担当しているかということは、けっこう影響するんですよ。

児美川：そんなに属人的なんですね。かなりの驚きです。

# 最新の「学習指導要領」が、「絵に描いたモチ」になってしまっている意外な理由

児美川 孝一郎, 前川 喜平プロフィール

前川：戦前の陸軍の関東軍は暴走しちゃったわけじゃないですか。ああいう強硬な中堅将校がいると、全体が引きずられちゃうことがあるわけですね。合田君はOECDの考え方の影響を強く受けているし、経済産業省が教育に乗り込んでくる動きにも乗っかっちゃったわけですね。

児美川：なるほど。今回の学習指導要領改訂は、ほぼ同じ時期にOECDが進めていた「Education 2030」のプロジェクトの影響もあったわけですね。私などからすれば、日本も参画していたそのOECDプロジェクトにおいて、常に表に見えていたのは、元文部科学副大臣でもあった鈴木寛さんなのですが、実は文科省内には別のキーパーソンが存在していたというところでしょうか。

確かにそう考えると、現行の学習指導要領が、教育内容ベースではなく資質・能力ベースへ、OECD的に言えば「コンピテンシー・ベース」へと転換した背景はよく理解できるように思います。もちろん、そんなに属人的に決められるのがいいこととは思えないのですが。

